趣旨説明

説明者紹介

村﨑　孝宏（むらさき　たかひろ）

熊本大学大学院修士課程修了。熊本県文化課課長補佐、熊本県立装飾館分館歴史公園鞠智城・温故創生館長を経て、現在熊本県立装飾古墳館長。

趣旨説明

熊本県立装飾古墳館長　村﨑　孝宏

装飾古墳館の村﨑です。趣旨説明の前に一つだけお断りをさせて頂きます。言葉が中々通りにくい、聴き取り難いという事もございますので、ここで発表する時だけマスクを外させていただきたいと思います。

本日はご来賓の皆様をはじめ、このように多くの皆様にご参加いただき、心より感謝申し上げます。また講師の先生方におかれましては、お忙しい中、本シンポジウムへのご出席、ご講演を快くお引き受けいただきましたこと、厚く御礼を申し上げます。

時間も限られておりますので、本日のシンポジウムの開催の趣旨につきまして、簡単ではございますが、ご説明をさせていただきます。鞠智城は、皆様ご存知のとおり、山鹿市と菊池市にまたがる標高一四〇メートルほどの平坦な米原台地に所在します。周囲を約三・五キロにおよぶ外郭線が巡り、その面積は約五五ヘクタールにも及び、『続日本紀』文武二年、西暦六九八年五月の繕治の記事を初見とする、いわゆる「朝鮮式山城」に分類される古代山城の一つであります。これまで鞠智城は、他の古代山城との地形や立地、選地のあり方に違いが認められることから、築城目的が他の古代山城と比べて異なるのではな

いかという意見、研究もございました。さらに築城の記録が見られないことから、これまで多くの先学諸氏によって、いつ、誰が、何の目的で築いたのかとする疑問が呈せられ、その研究がなされ、論じられてきたところでございます。

築城に関する考え方には、大きくは次の二つがあります。一つは対外防衛用の城であるという考え方、それからもう一つが対隼人など南九州支配の拠点とする考え方でございます。

築城の時期については、築城記事はございませんが、六六三年の白村江の戦いに敗れたことを契機として、西日本各地に築かれた古代山城である大野城や基肄城とともに大宰府によって繕治されるという記録があることから、これらの二つの城と築城の時期には大きく差はないものと考えております。

また、熊本県教育委員会では、平成二四年三月にそれまでの調査成果について総合報告書を取りまとめました。この総合報告書では、鞠智城が七世紀第三四半期から一〇世紀第三四半期頃までの約三〇〇年間存続をしたこと、その間、建物の構造や配置、土器の出土量の増減などから五つの時期に区分できることが明らかになっております。時期によって城としての機能が大きく変化をしながら存続したことが分かってきているところです。『続日本紀』の西暦六九八年の記録に見られる「繕治」の時期は、鞠智城の五期区分の中で第二期にあたります。

『日本書紀』をはじめとする六国史に城名がみられるもの、これが一一城ございます。そのうち未だその所在地がわからないものが五城含まれております。その中に本日のシンポジウムに関連する山城として三野

城と稲積城の二城がございます。この二つの城は、鞠智城が繕治された翌年の文武三年、西暦六九九年に「大宰府をして三野、稲積の二城を修らしむ」とあることから九州の中にあった山城であるということはわかります。ただ、この所在地につきましては、今のところ北部九州説と南九州説に分かれて、まだ正式には決着をみていないところでございます。本日ご講演いただく永山先生は南九州説をとられているとお聞きしております。いずれにしましても、これが南九州に所在するということを仮定すれば、大和政権による九州支配、とりわけ南九州への支配拡大の様相の理解に重要な役割を占めている城ということになります。

本シンポジウムでは、考古学の面から古墳時代研究の第一人者であります兵庫県立考古博物館長、和田晴吾先生に「ヤマト王権と九州の古墳文化」についてご発表を頂き、日本古代史研究の第一人者の明治大学名誉教授、吉村武彦先生に「律令国家の辺要政策と肥後国」について、そして隼人研究の第一人者であります・サール学園の永山修一先生に「南九州と肥後国」についてご発表いただくこととしております。このご発表を受けて本日は二点ほど検討したい、明らかにしたいことを考えております。一つ目が畿内と九州の古墳文化からヤマト王権と九州の交流について考えたい。例えば宇土半島産の阿蘇溶結凝灰岩「馬門石」製の石棺が畿内大王墓に採用されていたり、あるいは筑後地方や菊池川流域に見られる石人石馬、こういったものが磐井の乱の後、消えていく、使われなくなっていくことや、その後の埴輪の採用、それから装飾古墳の分布などのあり方、これらの点がその後の九州、肥後国にどのように繋がっていったのか。そして二つ目が、南九州地域への律令制の浸透、支配の拡大にどのように関わったのかについて議論ができたらと考えて

おります。これらの議論によって、鞠智城が築かれた場所、この地が選ばれた意味と取り巻く社会環境の変化、要請によってどのような機能役割が求められていたのかを明らかにできればと考え、本日のシンポジウムのテーマとさせていただきました。以上、簡単ではありますが、本日のシンポジウムの趣旨の説明とさせていただきます。本日は最後までよろしくお願いを致します。